

銭形平次捕物控

七人の花嫁

野村胡堂

青空文庫

本篇もまた、平次の独身もの。
許嫁の美しくて純情なお静が
平次のために喜んで死地に赴
きます。

一

「やい、八」

「何です、親分」

「ちよいと顔を貸しな」

「へ、へ、へッ、こんな面でもよかつたら、存分に使つて下せえ」

「気取るなよ、どうせ身代りの贋首にせくびつてえ面じゃねえ、顔と言

つたのは言葉の綾あやだ。本当のところは、手前の足が借りてえ」

捕物の名人と謳うたわれるくせに、滅多に人を縛ったことのない御

用聞の錢形の平次は、日向ひなたでとぐろを巻いている子分のガラツ八

にこんな調子で話しかけました。

松は過ぎましたが、妙に生暖かいせいか、まだ江戸の街にも屠^と蘇^その酔いが残っているような昼下がり、中年者の客を送り出すと、平次はすぐ縁側へ廻って、ガラツ八を居睡^{いねむ}りから呼び起したのです。

「へエ——、どこへ飛んで行きやアいいんで——」

「今の話を聞いたらう、あの客が長々と話し込んだ——」

「いいえ」

「聞かねえ？」

「人の話なんか聞きやしませんよ、そんなさもしい八さんじゃねえ」

「いい心掛けだ、——と言ってえが、実は居睡りをしていたんだらう」

「まアそんなところで、——何しろ日向は暖^{あつた}けえし、懷は涼しいし、凝^{じつ}としていりや、睡くなるばかりで——」

「呆^{あき}れたものだ。まアいいやな、俺が詳しく復^さ習^らつてやろう」

「お手数でもそう願いましうか」

「黙つて聞けよ」

「へエ——」

平次の態度には例^{いづも}に似気なく真剣なところがあるので、無駄の多いガラツ八も、さすがに口を緘^{つぐ}んで、親分の顔を見上げました。
「今ここへ見えたのは、十軒^{じゅっけん}店^{だな}の八百徳^{やおとく}の主人だ。一人娘の

お仙せんを、同じ商売仲間の末広すえひろ町の八百峰やおみねの跡取り息子に嫁にやるについて、俺の力が借りたと言うのだよ」

「悪い虫でも付いているんでしょう、どうせ当節の娘だ」

「そんな話じゃねえ。聞けば近頃、神田から日本橋へかけて、花嫁がチヨイチヨイ消えてなくなるそうだな」

「それなら聞きましたよ。祝言の晩に行方知れずになった花嫁は、暮からこつち、二人ぐらいあるでしょう。どうせ言い交した男でもあつて、いよいよという晩に花嫁姿で道行みちゆきを極めたんじやありませんか。土壇場に据えると女の子は思いのほか強くなりますからね」

「ところが、八百徳の主人の話では、消えた花嫁が三人もあるん

だそうだよ」

「妙に気が揃ったものですねえ」

「そんな暢気のんきな事を言っちゃいられない、一と月や半月のうちに、花嫁が三人も行方知れずになるといふのは、少し可怪おかしくはないかな、八」

「そう言えばそうかも知れませんね」

「どこの家でも、娘に男があつて逃げたと思ひ込んでゐるから、世間体を憚はばつて表沙汰にはしないそうだが、八百徳の主人は、どうも自分の娘も消えてなくなりそうで心配でたまらないと言ふんだよ」

「なるほどね」

「そこで手前^{てめえ}へ頼みというのは――」

「そのお仙とかいう娘に、虫が付いてるかどうかが嗅ぎ出して来いというんでしよう」

「そんな気障^{きざ}な用事じゃない。娘の身持は八百徳の主人が引受けるって言うから、差し当りそれを信用するとして、手前はソツと嫁入りの行列に蹶^ついて行つて、一と晩見張つていさえすりゃいいんだ」

「なるほど、こいつは、嫌な役目だ」

「何だと、八」

「智恵も銭も要^いらねえ代り大した辛抱役だ。花嫁に蹶^ついて行つて、三三九度から、床盃まで見せられた日にや、全く楽じゃないぜ」

「贅ぜいたく沢を言うな」

「それでも独り者ですぜ、親分」

「独り者だから、そんな場所によく眼が届くんだ、役不足なんか言っちゃならねえ」

「ヘッ、助からねえな」

ガラッ八は文句を言いながらも、頭の中では、その晩の冒険に對する、いろいろの計画をめぐらしておりました。

二

日本橋の十軒店から神田の末広町まで、自動車を飛ばせば十五

分くらいで行つてしまひますが、昔の花嫁の行列はそんな手輕なわけには行きません。

町内の駕籠かごせい清から別仕立の駕籠が五挺、花嫁と、仲人なこうど夫婦と

嫁の付添いと、親類の重立つた者が乗つて、あとは定紋の付いたちようちん提灯を挟んで、思い思いに歩くところですが、時節柄物騒と

いうので、駕籠だけを飛ばせ、仕出しはゆるゆる後から練つて行

こうという寸法、韋駄天いだてんのような粒選りの若い者に担がせた五挺

の駕籠は、江戸の街の宵霜よいしもを踏んで、ちようど明神下から鼠ねず

屋横町よこちようへ抜けようとした時でした。

闇の中から不意に飛んで来たのは、一本の棒、これが花嫁の乗つた真ん中の駕籠の、先棒の股の間へサツと入りました。

「あッ、何をしやがる」

と言つた時は、もう見事につんのめつて、弾みの付いた駕籠は、往來の真ん中へドタリと落されました。

「それ出た」

それくらいのこととは心得た後棒の若い者、息杖いきづえを取つて花嫁の駕籠の前に立塞たちふさがりましたが、相手はその出鼻くじを挫くように、横合から飛出して、胸のあたりをドンと突きました。

なにぶん宵闇の中に起つた不意の出来事で、それに、曲者は恐ろしい手練、後棒の若い衆は思わず跳ね飛ばされて尻餅をつくと、その間に飛付いた、第二、第三の男、物をも言わずに花嫁の駕籠を引つ漑さらつて、引摺るように、横手の狭い路地の口へ――。

「野郎、待ちやがれ」

先棒は漸くようや起き上がりましたが、向う脛むこずねを強したたかにやられて、急には動けません。前後の四挺の駕籠は、このとき漸くようや下ろされて、八人の若い者が、

「何をしやがる」

息杖を振りかぶつて、八方から花嫁の駕籠を追い駆けました。幸い路地は三尺の抜け裏で、駕籠は容易に通りません。花嫁の駕籠は少し斜めに、その口を塞いだまま放り出されたところへ、十人の威勢のいいのが、十本の息杖を振りかぶつて、すかさず追いついたのでした。

別に町駕籠を仕立てて、花嫁の行列のすぐ後に続いたガラツ八

は、この騒ぎを見ると転がるように降り立ちました。

「とうとう出やがったか、逃すな」

それでも商売柄、一番先に路地の口に飛付きました。が、花嫁の駕籠が入口を塞いで急には曲くせもの者の後を追うことも出来ません。

「えッ、面倒臭え」

駕籠を飛越して路地の闇に入ると、鼻の先に通せん坊をしたのは恐ろしく岩がんじょう乗な木戸。

「やい、ここを開けろ」

押しても叩いてもビクともすることではありません。

そのうちに、四挺の駕籠から飛降りた仲人夫婦やら付添いの者、これは一番先に花嫁の安否ということが頭へ響きます。

飛付くように駕籠の垂たれを押上げて、

「お仙さん、驚いたろう」

と見ると、中は空っぽ。

「あッ」

咄嗟とつさの間に、駕籠の中から花嫁は攫さらわれてしまったのでした。

三

八百峰の近くまでたどり着いて、いくらか心持すきに隙すきの出来たところを狙ったやり口や、抜け裏を利用して、駕籠で入口を塞いだ細工などを見ると、容易の曲者ではありません。

「親分、何とも申し訳がねえ、俺は腹でも切りてえ」

すつかり恐れ入って報告する八を宥^{なだ}めるように、

「いや、その様子では俺が行っても失策^{しくじ}ったかもわからねえ。手

離せねえ用事があつたにしても、手前一人でやったのが間違^{まちが}えだ」

平次はそんな事を言っております。

時を移さず、鼠屋横町の抜け裏から、八百峰の立ち騒ぐ人達の様子、驚き呆れる十軒店の八百徳まで廻つてみましたが、手掛りらしいものは一つありません。

「六尺棒を若い衆の股の間に投げ込んだ手際じゃ、ザラの泥棒や人さらいじゃねえ——」という噂^{うわさ}を聞いたのがせいぜい。平次は何の得るところもなく、
あけがた
暁方^{あけがた}近くなつて引揚げて来ました。

その頃は、諸大名の門番や、見附の番人は言うに及ばず、渡り仲間ちゅうげん、輕輩な士分の者まで、一種の武器として、棒を使つたもので、駕籠屋の股へ棒を放り込むくらいの事は、ちよつと心得のある者なら、誰にだつて出来ます。

花嫁は評判の堅い娘で、八百峰の総領とは許嫁いいなずけ同士、色恋の道行でないことは、口善悪くちさがない近所のお神さん達かみまでが牡丹餅ぼたんもち判ばんを捺おします。

それに、盗まれた花嫁は、暮から勘定して四人目、手口はそれぞれ違います、とにかく、余程深い企みのあることは、鼻の良い平次には、判りすぎるほど判ります。

それから三日目。

「親分、聞きなすったか」

朝のうちから、ガラツ八が呶鳴り込んで来ました。

「何だ、八、相変らず騒々しい」

「石原いしはらのも失策しくじったんですとさ」

「何？」

「昨夜柳原河岸で、石原の利助親分りすけがあの大い眼を光らせてい

る中から、五人目の花嫁さくらが攫さらわれたっていいいますぜ。材木河岸の

美倉屋みくらやの娘で、今度のは大した容貌きりようだ」

「フーム」

「これで五分と五分だ、石原のでさえ馬鹿にされたんだ、八五郎ばかりが失策ったんじゃねえ——、態ざまアみやがれだ」

「馬鹿野郎ッ」

「ヘッ」

あにき

「石原の兄哥が失策ったからって、手前のドジの言い訳になるか」

「ヘエ——」

「俺はそんな心掛けの人間は大嫌いなんだ。こっちはこっち、石原の兄哥は石原の兄哥だ。人の失策しくじりを喜ぶような野郎は、俺のところにて貰いたくねえ」

「ヘエ——」

「手前は人間はガラガラして、まことに出来のよくねえ野郎だが、悪気のないところだけが取柄とりえだったんだ」

「ヘエ——」

平次の怒りは、いつになく峻烈しゅんれつを極めました。さすがのガラツ八も、あまりの風向きに、しばらくは口も利けません。

「さア、出て行きやアがれ、俺はそんな根性の曲った野郎を見ていたかアねえ」

「親分、なるほど、そう言われてみると、あつしが悪かった、勘弁しておくんなさいまし」

「ならねえ」

「そう言わずに、親分」

「詫わびを入れたきやア、石原の兄哥へ行つてそう言ってみろ」

「……………」

「まごまごしやがると、向う脛すねをカツ払うぞ、石原の兄哥の手柄

を喜ぶような心持になったら、改めて逢つてやる」

あまりの剣幕に驚いたか、ガラツ八は二つ三つお辞儀をすると、
怯^{おび}えた猫の子のように、後ずさりに格子^{こうし}の外へ飛出してしまいま
した。

日頃温和な平次が、こんなに怒るのは、何か仔細のあることで
しよう。人のいいガラツ八は、押して聞き返す勇氣もなく、妙に
諦^{あきら}め兼ねた涙ぐましきで、いずこともなく立ち去つてしまいま
した。

四

間もなく、第六人目の花嫁が盗まりました。新革屋町の染

物屋の娘お辰たち、同じ神田鍋町の酒屋伊勢直いせなおへ嫁入りさせましたが、どこでどう掬すり替えられたか、向うへ行つて、綿帽子を取つてみると、花嫁が變つていたということです。

家を出て駕籠かごへ乗せるまで、仲人は花嫁から手を離さず、伊勢直への道中は、時節柄出入りの頭かしらや職人に頼んで嚴重に守らせ、駕籠を下りると、仲人の外に、多勢の人垣を作つて送り込んだのですから、途中で掬すり替えられるはずは万に一つありません。

その上、何ということでしょう。この晩は双方から頼み込まれて、特に錢形の平次が乗り出し、宵から嫁の姿を見張つて一刻いっときも綿帽子から眼を離さなかつたのです。

嫁のお辰は、里方の染物屋にいるうちに替えられたに相違ありませんが、それが、どこで、どうして入れ替ったか、さすがの平次にも、全く見当は付きません。

お辰の代りに、花嫁に仕立てられたのは、どこから来たともなく、二三年この方、神田あたりを彷徨い歩く女乞食のお六、これは、何を訊いても一向取り止めのない始末です。

「お前はどこから——誰が連れて来たんだ、言わないか」

「言わないよ」

「言わなきやア打つよ、呆れた馬鹿だ」

寄つてたかつて責めると、

「黙っていさえすれば、伊勢直の若旦那のお嫁にするって言われ

「たんだ、言うもんか」

この調子では全く手が付けられません。

もつとも、評判娘のお辰とは似も付かぬ容きりよう貌で、年も三十は

幾つか越したでしょう。綿帽子さえなかったら、お辰と間違えら

れるお六ではありませんが、女乞食にしては様子がいかにも華きやし

奢やなのと、一言も口を利かなかったので、伊勢直へ連れ込むま

で、誰も気が付かずにいたのでしょう。

それよりも重大な原因は、近頃の物騒うわさな噂に怯えて、人間とい

う人間が、あまりに緊張しきっていたために、思わぬ心理的欠陥

に乗ぜられたのでしよう。なにしろ伊勢直は煮えくり返るような

騒ぎ、せつかく宵から大目玉を剥むいていた平次も、今度という今

度は、すっかり面目玉を踏みつぶしてしまいました。

なおもお六を捉^{つか}まえて、嚇^{おど}かしたり、すかししたり、一と晩がかりで責め抜いてみると、「誰やら知らない人が来て、伊勢直の若旦那と添わせてやるからと言って、知らない家へ引摺り込んで、湯へ入れて、化粧をさせて、紋付を着せて、染物屋の裏口からそつと引入れた——」というだけは解りましたが、お六の足りない脳味噌は、問い詰められると混乱するばかりで、「誰やら」という人相も「引入れられた」という家も、まるで見当が付きません。解ったことと言うと、お六の着ていた紋付や帯は、お辰の着ていた品と、色も柄もそっくりそのままというほどよく似ておりますが、実は、今までに誘^{かどわか}拐された五人の花嫁の身に着けた品の

うちから、お辰の嫁入り支度と似寄りの品を集めたもので、少し気を付けさえすれば、誰にでもその違いは判る程度のもので、たつたことです。

「錢形の親分、御覽の通りの始末だ。誰の所^{せい}為というわけではないが、どうか嫁を探してやって下さい。六人の花嫁を一緒に探して下されば、それに越した事はありません。万一の事があつたら

――

伊勢直の主人はゴクリと固^{かた}唾^たを呑みました。

「面目次第もございません、平次の男に賭けて、キツと探し出してお目にかけます。三日と言いたいが、せめて後五日、この月中には何とかいたしましょう」

言葉は柔かいが、平次の胸の中には、勃然^{ぼつぜん}として、命がけの決心^{きま}が定つたようです。後ろ指をさされるような心持で、そのまま外へ――。騒^{さわ}ぎを聞いた近所^{きんじよ}の人が往来^{わらい}へ垣^{かき}を築いて、闇の中には物々しい囁^{ささや}きが微風のように動きます。

五

「おつ母^かア、家に居なさるか」

「あら親分」

お静は平次を迎えてイソイソと立ち上がりました。平次の許^{いいな}嫁^{ずけ}になつてからは、両国の水茶屋へ出るのは止^よしてしまつて、

八丁堀の与力よりき、笹野新三郎のところへ、手不足の時だけ手伝うのがせいぜい、大抵は家にいて、母親を相手に、嫁入りの心支度ともなく、針を持つ日の多いこの頃だったのです。

この時、お静は、平次とは九つ違いの十八、厄前に祝言の盃だけでも済ませるつもりで、仲人まで立てておりましたが、お上の御用の多い平次は、せめて春はるなが永にでもなつたら——と、一日延しに延していたのです。

美しさも賢さも申分なく恵まれたお静は、平次の顔を見ると、ポツと顔を紅あからめて立ち上がりましたが、それを抑えるように、「まあ、親分、よくいらつしやいました」

次の間から母親が出て参ります。

「すっかり御無沙汰をしちやった。お変りもないようで、こんな結構なことはねえ。ところで今日は少しお願いがあつて来たんだが――、ちようどいい塩梅だ、お静坊あんべえも一緒しいに聞いておくれ」

「まアまア、御用の多い身体を気の毒な。そう言つて使いでも下されば、こつちから伺つたのに」

「とんでもねえ、年寄りを歩かせるようないい話じゃないんで――、実は」

平次は言いにくそうに頬を撫なでました。

「……………」

「これは仲人から言つて貰うのが順当だが、それでは俺の心持が済まねえ」

「……………」

おやこ
 母娘は黙って顔を見合せました。重大な意味のあるらしい、平次の真意を測り兼ねたのです。

「ざつくばらんに言ってしまえば、一日延しにしていた私とお静あつしの祝言を、わけがあつて、この月のうちに運びたいと思うんだが、どんなもんだろう」

「えッ、早いに越したことはありませんよ。私もお静も、親分がその気になって下さると、どんなに嬉しいかしれはしないが——」
 母親は真つ紅になって差し俯向くお静を振返つて、こう続けました。

「この月といつても、あと三日しかないから、支度がとても間に

合わないよ、親分」

「おつ母^かア、それも承知だ。が、あと三日のうちに祝言の真似事だけでもしないと、俺の男が立たないことがあるんだ」

「親分の男が？」

「そう言っただけでは解るまいが、——知つての通り、近頃あつちこつちで花嫁が盗まれる。それも、神田一円と日本橋の数ヶ町かけての祝言ばかりを狙つて、暮から六人も行方知れずだ。神隠しに逢うのか誘^{かどわか}拐されるのか、ともかく容易なことじゃねえ」

「そうだってね、親分」

「笹野様もことのほか御心配で、平次何とかしろとおつしやるが、こればかりは雲を掴^{つか}むようで、どうにも手におえねえ。神隠しな

どという言い訳は、お上の筋は通らないから、十手捕縄を預かる者から言えば、これはどこまでも悪者の仕業に相違ねえ」

「……………」

「ガラツ八も石原の兄^{あにき}哥^{しくじ}も失策^{しくじ}ったのを承知で、伊勢直の祝言へ行つて見張つたはいいが、この平次までが見事に裏を搔かれ、尻尾を巻いて引き下がってしまったようなわけだ」

「……………」

「世上の人が後ろ指をさしているようで、どうにも外へ出る勢いもねえ。お願いというのはここだよ、おっ母^かア」

「……………」

「この節はすっかり怯えてしまって、この界^{かい}限^{わい}には猫の子の祝

言もねえ。ぐずぐずしているうちに、相手が見切りを付けて、六人の花嫁を纏めてまと殺めるとか——そんな事はないまでも——、遠国にでも持出されたら手の付けようがねえ。ここでもう一度相手から仕掛けさせて、動きの取れぬ証拠を握るためには、たった一つでもいいから祝言が欲しいんだよ」

「……………」

「俺の眼の前で花嫁を掘り替えた相手だ。平次が嫁を貰うといつたら、万に一つも黙って見ているはずはねえ。お静坊に、幾度も危ない思いをさせちやア気の毒だが、一番花嫁になつて誘拐かどわかされて、曲者の巣を探つて貰うわけには行かないだろうか」

折入つての頼み、男の額には冷汗さえ浮べておりますが、あま

りの事に、母親は返事のしようもありません。しばらく胡麻塩ごましおになつた首を襟えりに埋めて、何を考えてもなくぼんやりしてしまいました。

「親分、そんな事でお役に立つなら、どうぞ私を使つて下さい」
祝言をしてとは言いませんが、お静は顔を上げて、平次よりはむしろ、母親の心持を測り兼ねた様子でこう言いました。

「お静、何を言うのだえ、お前」

「いえ、おつ母かさんの御心配は御尤ごもつともですが、私は親分のお力を信じ切っております。高田お薬園の手入れの時だって、お茶の水の空家に吊された時だって、親分は見事に救つて下すつたじゃありませんか。ね、おつ母さん、どうぞ私を、今晚にも親分のと

ころへやつて下さい」

母親の膝に手を置いたお静、それを揺すぶりかげんに、少し甘える調子でせがんでおります。平次はこの健けなげ気な娘の心意気に打たれて、両手を合せて拝みたいような心持で、黙って差控えました。

六

その翌々日、平次はお静と祝言の盃をあげることになりました。仲人は笹野新三郎の用人、おだじまでんぞう小田島伝蔵老人、いづれ春には興こしい入いれするはずで、ボツボツ支度を心掛けていた矢先ですから、貧し

い調度ながら、一と通りのものは揃っております。

お静の家から平次の家までは、ほんの二三町、駕籠かごにも車にも及びません。平次とお静が強たつて断るのも聞かず、小田島伝蔵老人夫婦の外に、平次の朋輩やら子分やらが二三人、花嫁姿のお静を遠巻きにして、平次の家に送り届けたのは、その晩のまだ宵の内でした。

ガラツ八が居たら、さぞ頓とんきよう興な声で、一座を賑わしてくれらるだろう——と思うと、見えざる相手の仕掛けを待つて期待と闘争心に燃える平次の胸にも、何かしら一脈の淋しさが冷たい風のように吹き入ります。

新妻を攫さらわせるつもりの平次、祝言の席から誘拐かどわかされるつも

りのお静、二人の気持を薄々読んだ客——この祝言は、まことに不思議なものでした。

どうせ裏店住まいの平次、智恵や俠気はあつても、金つ気などはろくにありません。それでも花嫁を迎える用意だけは一通り調べて、借り物ながら屏風びようぶを廻し、島台を飾り、足の高い膳や、絹物らしい座蒲団ざぶとん、時節柄寄せ集め物の火鉢まで、どうやらこうやら揃いました。

二た間打つこ抜いた室へやが式場で、その裏が花嫁の支度部屋、長屋の者が集まつて、目出たく三三九度が済むと、「高砂たかさごや——豆腐イ」と言つた調子のが始まります。

紋付姿の平次も立派でしたが、それにも増して、お静の花嫁姿

は鮮やかでした。このまま、お開きとなれば、何もかも無事に納まります。六人の花嫁を盗んだ曲くせもの者も、さすがに銭形の平次の花嫁には手を付けられなかったのでしょう——か。

やがて花嫁は次の間へ下がりました。怪し気ながら、紋付を脱いで、色直しということになります。盃は幾いくまわ巡りかして、さんざめく一座、誘拐かどわかしも何も忘れてしまつて、だいたい心持になつて来ましたが、どうしたとか、しばらく経つても、お静の姿が見えません。

「ちよいと」

髪結のお鶴つるさんが、屏風から顔を出して小田島老人を呼びました。

「嫁さんはどうしたんだい」

「先ほどから、お見えになりません」

「何？」

一座は騒然として立ち上がりました。頭から被った風呂敷でもかなぐり捨てたように、乱酔が一遍にさめてしまったのです。

「色直しの着付けを済まして、御不浄へいらしたようですが、それつきり見えません」

界限かいわいでよく知られた、名人の髪結、額から右の眼へかけて赤い痣あざのあるお鶴が、その醜い顔を歪ゆがめておろおろしております。

「とうとうやりやがったな」

聳姿むこの平次、忙せわしく羽織をかなぐり捨てると、足袋たびはだし跣のまま

パツと裏庭へ飛出しました。誰が開けたか、路地へ抜ける木戸は
 バタバタになつて、そこには夜目にもほの白く、
たいまいかんざし 瑤瑠の簪が一本落ちております。
まがいもの 贋物ながら、

七

平次の活動は、本当に火の出るようでした。六人の花嫁を救い
 出すために、あらゆる物を賭けてしまった平次は、このうえ失策
 を重ねるようなことがあれば、死んでも申し訳が立たないことにな
 るのです。

世上の噂うわさ、笹野新三郎の督励、それはしばらく我慢するとして

もお静の母親の嘆きは、一刻も見てはいられません。それに、あの自分のために進んで、死地に飛込んだお静の、清浄無垢な美しい身体を考えると、賽さいころの目一つに、あらゆる身しん上しょうを張り込んだ人間のよう、平次は腹の底から胴顫どうぶるいを感じるのでした。

平次は今までも決して遊んでいたわけではありませんが、もう一度必死のスタートを切って、嫁入りと関係のある、あらゆる商売を調べてみました。第一番に、神田日本橋の呉服屋、越後屋、白木屋をはじめ、筋の立ったところを全部当ってみました。江戸中に毎日、幾つあるか判らない祝言のうちから、神田日本橋の選えり出して聞くなどは、呉服屋へ行ったところで、何の足しに

もならないことが判つただけでした。

次は鰹節屋、小間物屋、箆笥屋、諸道具屋、肴屋、酒屋、

いやしくも嫁入りの御用を勤めそうな店は、自分か子分か一通り廻ってみました、どこにも怪しい節などはなく、また婚礼の日取りなどを聞き廻つた人間の噂は一つもありません。

しかし、七人の花嫁誘拐の手口は、悉く周到な用意と、長い間の計画でやったことで、偶然の廻り合せで、行当りばつたりな仕事でないことはよくわかつております。

念のため、一度は諦めた女乞食のお六を、その巢にしている明神様の裏手の、建て捨てた物置小屋へ見に行きましたが何としたことでしょうか、これは、見るも無慙に縊り殺されて、ボロと藁

屑ずの上に、醜い死骸を横たえております。

「しまったッ、こんな事なら、もう少し口を利かせるんだった」
と言ったところで追い付きません。

今度ばかりは銭形の平次ほどの者も、全く持て余してしまいました。

下町中の質屋という質屋、古物屋こぶつやという古物屋は、子分の者を飛ばして詮索しましたが、暮からこつち、嫁入道具などを持ち込んだ者は一人もありません。

こんな空しい努力を続けているうち、たった一つ気の付いたことは、石原の利助と、ガラツ八が、平次とほぼ同じ調べ口で、あつちこつちを探し廻っているということだけでした。

八

平次は、お静にいろいろのことを言い含めておいたはずですが、不思議なことに、誘拐かどわかされたお静からは、何の合図もありません。

お静の襟や帯揚げの中には、格子や雨戸の隙すきからでも投ほうれるように、平次宛に書いた手紙が、幾本も用意してあったはずですが、どんな場所に閉じ籠こめられたか、そんなものは、一つも平次の手許に届かなかったのです。

そればかりでなく、お静の帯の間や、懷の中には小さい竹笛が

幾つか潜めてあるはずです。その笛を引つ切りなしに吹いてくれさえすれば、平次の子分達が聞込まないまでも、近所の人が変に思つて、井戸端の噂ぐらいに上らないはずはありません。

平次は夜となく昼となく、神田から日本橋を、へとへとになるまで彷徨^{さまよ}い歩きました。途^{みち}に落ちた鼻紙にも驚き、按摩^{あんま}の笛の音

にも胆を冷して、本当に気の触れた犬のように駆け廻つたのです。しかし何もかも無駄でした。もしかしたら、六人の花嫁と一緒に、美しいお静の死体は、今日にも大川に浮くかも知れない——といった恐ろしい幻想に、平次は休むことも眠ることも出来ない有様になっておりました。

犇^{ひしひし}々と身に迫るのは、喰い入るような恐ろしい後悔です、疲

れ果てた足を引摺るように、聖堂裏から昌平橋を渡つて柳原の方へ出ようとする平次の、塩垂れ果てた肩へ、後ろからソツと手を置いたものがあります。

「親分、御心配ですね」

振返つてみると、髪結のお鶴、醜^{まず}い顔ですが、それでも人のいい笑いを浮べて、慰め顔に、平次の顔を差しのぞきます。

「あ、お鶴さんか」

平次は夢見るように立止まりました。

「お静さんの行方は、少しも判りませんか」

毛筋を鬢^{びん}に差して、襟の掛った小袖、結び下げた黒^{くろ}緇^{じゆ}子の帯は、少し猫じやらしに尻を隠します。

「困ったよ、お鶴さん、お前さんにも心当りはないだろうか」

「ホ、ホ、ホ、銭形の親分がそんな事をおつしやつちや困るじやありませんか、でも、今度ばかりは、本当にお気の毒ねえ」

親切とも、皮肉とも聞える言葉を空耳に、平次はお鶴に伴ついてその家の前まで行っておりしました。

「ちよいと寄っていらつしやいな？ お茶でも淹いれましょう」

「有難う、少し休まして貰おうか」

断るかと思つた平次は、お鶴に誘われるまま、細かい格子戸を潜りました。

中は女やもめの住みそうな、磨き抜かれた調度、二三人の若いすきて梳手が、男の客を物珍しそうに、奥の方から娘らしい視線を送つ

ている様子です。

「出^で廻^がらしでございます」

汲んで出す茶、一と口飲んで、長火鉢の猫板の上に置いた平次。

「あの娘さん達は、夜もここへ泊んなさるのかね」

「いえ、用事のない時は、日が暮れると銘々の家へ帰しますよ」

「住込みもあるんだろう」

「私はこんな性分で、人様の娘を預かることなどは、面倒臭くて出来ませんから、皆んな帰って貰いますよ」

「すると夜分はお鶴さん一人だね」

「え」

「ちょうどいい塩^{あんべえ}梅だ、これからチョコチョコ遊びに来るとし

よう」

「あれ、冗談ばかり、そんな事を言うとは罪ですよ、これでも女なんですから」

「それはそれとして、いい加減にして、頭巾ずきんを脱とつたらどうだえ」

「え？ 何をおつしやるんです」

お鶴は思わ^{きつ}ず吃きつとなりました。

「七人の花嫁を出して貰おうか」

九

平次の手はサツと延びて、お鶴の左の手首をピタリと掴つかみます。

「何をするんだえ、いやらしい、巫山戯^{ふざけ}たことをすると、岡っ引だつて勘弁しないよ」

と言うのを引寄せて、グイと掴んだ女の腕をしごく、二の腕に赤々と朱彫^{しゅぼり}の折鶴。

「丹頂^{たんちよう}のお鶴、御用だッ」

「何をッ」

どこから取出したか、お鶴の手には、キラリとヒ首^{あいくち}、平次の首にサツと来るのを、叩き落して膝^{ひざ}の下へ。

「お前が怪しいことは、早くから気が付いたが、証拠がなくて踏込まずにいたんだ。花嫁が七人も続けざまに消えてなくなるのに、それを手掛けた髪結を疑わずにいるほどの平次と思うか」

言う内にも、懷から蛇のように引出した捕縄、見る見るお鶴の身体は高手小手に縛り上げられてしまいました。

「何をするんだ、私は女髪結のお鶴、下町でも知らない者はない。何を証拠に、銭形とも言われる者が縄を打つんだ」

畳を舐めさせられた額の赤痣は火のごとく燃えて、醜女の怨みの眼は、毒蛇のようにキラキラと光ります。

「黙れッ、あの壁を見ろ、ところどころに爪で引つ搔いた蛇の目の印があるだろう、あれはお静に言い付けた合図の葉しおり、俺の名前から思い付いた銭形だ。あの印があるところにお静が居るに相違ない——サア言え、七人の花嫁をどこに隠した」

「知らない知らない、たつて探したかったら、裏は神田川だ、水

の底でも覗いてみるがいい」

不貞腐れたお鶴、齒を食い縛つて、平次の顔を憎々しく見上げ

ます。

「七人の命には替えられない、言わなきやア、平次の宗旨にはないことだが、お前の身体を五分試しだ。これでもか」

平次もさすがに一生懸命です、額にふり注ぐ冷汗を片手なぐりに拭き上げると、女の手から打落した匕首を取つて、その白々とした喉へピタリと当てました。

「冷たくて、とんだいい心持だよ、さア一と思いに突いておくれ、

——お前に殺されれば本望だ。何を隠そう、私は長い間、お前におかぼ
岡惚れしていたんだよ」

それは恐らく本音でしょう。平次を斜め下から見上げる悪女の眼には、不思議な情火が、メラメラと燃えさかるのです。

「えッ、しぶとい女だ、言えッ、七人の花嫁をどこへやった」

思わずゾツとしながらも、平次はヒ首の背を返して、女の頬を叩きます。

「駄目だよ、そんな事を言っているうちに、七匹の雌は一と纏めまとにして江戸から送り出す手筈てはずが出来ているんだ。わたしは処刑おしおきになるだろうが、その代り私の首が梟さうされる頃は、お静を始め七人の花嫁は、島原か長崎へ叩き売られているよ」

「何？ 一と纏めにして江戸から送り出す？」

平次はサツと次の間の唐紙からかみを開けました。この騒ぎに、梳手

の娘達はどこへ行つたかわかりませんが、突当りの障子を開けると、目の下は真つ黒に濁つた神田川の流れ、平次の胸には、始めて事件の謎を解く最後の曙光しやこうが射したのです。

一〇

「石原の親分、そういったようなわけだ、面目次第もないが、当分ここへ置いておくんなさい」

ガラッ八は悄気しよげ返つて、利助の前に両手を突きます。

「……………」

利助は黙つて腕を拱こまぬきました。平次の恬淡てんたんな心持が、今はも

う判りすぎるほど判りましたが、長い間反目して来た利助は、ガラツ八の前に釈然として見せるには、少しばかり負惜しみが強かつたのです。

「ともかく、詫^わびをするなら、石原の兄哥にしろというくらいですから、あつしの言うことなど聞く錢形の親分じゃありません。ついでの時、どうぞ宜^{よろ}しく取りなして下さい。私はあの親分から見離されるくらいなら、頸^{くび}でも吊つて死んでしまいますよ」

道化たうちにも妙に真剣なガラツ八の調子を見ると、利助は何となく慥^{くすく}つたい心持になります。

「まあ、いいやな、その内に何とかなるだろう。しばらくここにブラブラしているがいい」

「有難うございます、親分」

二人がそんな話をしているところへ、表から利助の子分が二人連れで帰つて来ました。

「親分、変な噂を聞き込みましたよ」

「何だ？」

「両国の水よけに、ひぢりめん緋縮緬の片袖が引掛つていたそうですよ」

「えッ」

「そればかりじゃありません。この二三日、うこんいろ鬱金色の扱帯しづきだの、かこしほ鹿の子絞りの下締したじめだの、変なものが百本杭や永代へ流れ着くそうですよ」

「そいつは耳寄りな話だ、行つてみるか、八兄イ」

利助は立ち上がりました。

「参^{めえ}りましょう」

「お静さんを始め七人の花嫁は、どこか河岸つぷちの家にも押し込められているに違^{ちが}えねえ」

それから間もなく、利助とガラツ八は、子分の者に輕舸^{はしけ}を漕^こがせて、大川の右左を、上^{かみ}から下^{しも}へ、下から上へと見廻り始めたことは言うまでもありません。

日はもうトツプリ暮れて、筑波^{つくば}風^{おろし}が、灰色の水を渡ってピューと吹き起ります。

ちょうどその時。

銭形の平次も一艘^{そう}の輕舸を漕がせて、大川の上を見廻っており

ました。これは、浜町河岸から駒形まで、兩岸の人家には眼もくれずに、川の中に浮んでいる船にばかり目を付けております。

七人の美女をひと纏めにして、人目に付かぬように上方へ持つて行くには、船より外に手段はないと睨んだのでしよう。

橋の上手、この時候には滅多に見掛けない屋根船のもやつているのを、遠くの方から二三度窺った平次は、最早躊躇はしませんでした。

見ると目ざす屋根船は碇を上げて、上げ潮に揺るぎ出しそうな有様。

「待て待て、その船に不審がある」

宵闇の中から声を掛けた平次、輕舸をピタリと付けさせると、

ふなばた
舷から舷へ、サツと飛び移りました。

「何だ、いきなり人の船に入つて来やがつて」

みずさお

水棹を取り上げて、ガバと打つてかかるのを、身を開いて、ツ、ツ、ツ、懐へ入ると見るや当身一本、船頭は苦もなく水垢あかの中に仰のけ反ぞります。

中へ飛込もうとすると、

「誰だ、騒々しい」

胴の間から飛出したのは、一人、二人、三人、いずれも荒くれた大男、そのうちの一人は二本差のようです。

「御用だぞ、神妙にしろ」

「何をツ」

「七人の花嫁を誘拐かどかわしたのは、その方だろう」

「何を、それッ、相手は一人だ、斬つてしまえッ」

三人の男は、切っ先を揃えて、平次を三方から取り囲みました。平次の武器というのは十手が一挺。

真っ先に飛込んで来た脇差を引つ外して、十手を左に持換えると、右が懷に入つて、取出した青錢。

「エッ」

真っ先の一人は、左の眼を打たれて引退きました。

しかし相手はまだ二人、舐へさ先の方からはもう二三人船頭が助太刀に飛んで来る様子です。

平次は十手と青錢と交かわる交かわる飛かばして、わずかに身を防ぎまし

だが、相手の武家は思いの外の使い手で、平次も次第に圧迫されるばかりです。

大川の上から下へ、輕舸を漕がせていた利助とガラツ八は、この時漸く平次の危難を見付けました。

「それッ」

と屋形船へ舳先を叩き付けると、利助、ガラツ八を始め、二人の子分、

「銭形の兄哥あにき、もう大丈夫だ、利助が来たぞッ」

「親分、八五郎が参りました」

「御用ッ」

「御用ッ」

船の上には、一としきり乱闘が続きましたが、平次と利助の捕物上手な駆引と、一つは多勢の力で、大した過ちもなく、間もなく一味五人を、雁字がらめがんにじにしてしまいました。

中仕切を開けて入ると、胴の間には、縛られた七人の花嫁、踏み砕かれた花束のように一と塊かたまりになって顫ふるえております。

「あッ、親分」

その中でも一番美しくて、一番気の確かなお静は、平次の姿を見ると、悪夢から覚めたように飛起きて、駆寄りました。

*

七人の花嫁を誘拐した髪結のお鶴は、丹頂のお鶴という有名な女賊で、額から眼へかけての赤痣は、人目を忍ぶために絵の具で描かせたものでした。

しかし痣はなくとも恐ろしい醜婦で、三十過ぎるまで男というものに眼を掛けられたこともなく、もとより縁談を持込む物好きもなかったので、自棄やけと呪いこうとが嵩じて、世上の美しい花嫁を皆んな手当り次第に祝言の席から攫さらつて幸福の絶頂から不幸のどん底に落してやろうと、思い立ったのでした。

それを助けたのは、悉ことごとくお鶴の相棒や子分で、美しい盛りの七人の女を、船で島原か長崎へ持って行って、いい値に売り飛ばそうとする矢先を、危うく銭形の平次に捕まってしまったのです。

大川へ緋縮緬の片袖や、鬱金の扱帯を流したのは、お静の智恵だつたことは言うまでもありません。

ガラツ八を叱り飛ばして、利助のところへやった平次の真意は、言うまでもなく、この先輩と和解するためで、平次の蟠^{わだかま}りのない態度に、今度こそは利助もすっかり兜^{かぶと}を脱いでしまいました。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物控（九）不死の靈藥」嶋中文庫、嶋中書店

2005（平成17）年1月20日第1刷発行

底本の親本：「銭形平次捕物百話 第八卷」中央公論社

1939（昭和14）年

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1932（昭和7）年1月号

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：結城宏

2018年1月27日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

七人の花嫁

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>